

# キケロ『義務論』より：「目的分詞幹」をめぐって（ラテン語とフランス語 古典作品を素材に（10））

著者	秋山 学
雑誌名	ふらんす
巻	90
号	1
ページ	42-43
発行年	2014-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00153852">http://hdl.handle.net/2241/00153852</a>

# ラテン語とフランス語

古典作品を素材に 【10】

キケロ『義務論』より — 「目的分詞幹」をめぐって —

秋山 学

今月は、先に7月号でも取り上げたキケロ『義務論』が素材です。さっそく、原文を引用することにしましょう。

**原文** In primisque hominis est propria veri inquisitio atque investigatio. Itaque cum sumus necessariis negotiis curisque vacui, tum avemus aliquid videre, audire, addiscere cognitionemque rerum aut occultarum aut admirabilium ad beate vivendum necessariam ducimus. Ex quo intellegitur, quod verum, simplex sincerumque sit, id esse naturae hominis aptissimum. Huic veri videndi cupiditati adiuncta est appetitio quaedam principatus, ut nemini parere animus bene informatus a natura velit nisi praecipienti aut docenti aut utilitatis causa iuste et legitime imperanti; ex quo magnitudo animi exsistit humanarumque rerum contemptio. — *De officiis*, IV 13.

**仏訳** Au premier chef il appartient en propre à l'homme de rechercher et d'étudier la vérité. Aussi, lorsque nous sommes exempts d'affaires et de soucis pressants, avons-nous le désir de voir, d'entendre, d'apprendre quelque chose et tenons-nous comme indispensable pour vivre heureux, la connaissance des choses cachées ou étonnantes. D'où l'on comprend que cela soit le plus approprié à la nature humaine, qui est vrai, simple et net. A ce désir de voir la vérité s'ajoute un certain attrait de la prééminence, si bien qu'une âme naturellement bien douée ne veut obéir à personne si ce n'est à qui donne des préceptes ou à qui enseigne ou à qui commande, en vue du bien commun, conformément à la justice et à la loi : c'est de là que procèdent la grandeur d'âme et le mépris des vanités humaines.

**訳** まず人間にとって固有の業とは、真理の探索と究明である。それゆえわれわれは、必要な務めと心労から解放されているときには、何かを見たり聞いたり学んだりすることを望み、また秘められた驚くべき事柄に関する認識を、幸いに生きるために不可欠なものとする。ここから、真実にして単純、かつ真摯であることこそ、人間の本性にもっとも適わしきことだということが理解される。真理を知りたいというこの欲求に、いわば卓越性をめぐる希求が加わる。かく

して本性的に優れたあり方で形成された精神は、誰か指導の任に当たる人物が、教えたり有益のために正当かつ合法的に命じたりするのでない限り、その人に従おうとは望まない。ここに、精神の偉大さと、世俗的な事柄に対する輕蔑の念とが際立つ。

キケロは、ギリシア哲学の抽象的概念語を多数ラテン語に翻訳し、彼に続くローマの哲学者やラテン教父たちに、思索のための基盤を提供したことで歴史に名を遺しています。上の一節にも、抽象的概念語が多数見出されます。今回は「-tiō」という語尾に終わる次の5つの語彙に注目してみましょう。右側には、語源となる動詞の現在1人称単数、不定詞、完了1人称単数、完了（受動）分詞男性単数主格の形を記します。

- ① inquisitio (「探索」) < inquirō, inquirere, inquisivī, inquisitus;
- ② investigatio (「究明」) < investigō, investigāre, investigāvī, investigātus;
- ③ cognitio (「認識」) < cognōscō, cognōscere, cognōvī, cognitus;
- ④ appetitio (「希求」) < appetō, appetere, appetivī, appetitus;
- ⑤ contemptio (「輕蔑」) < contemnō, contemnere, contempsī, contemptus.

お気づきのよう、いずれの場合も、最後に記した完了（受動）分詞男性単数主格の語尾 -us を -iō に変えれば、先頭に出した各概念語が形成されることがわかります。

このようにラテン語においては、動詞の「三基本形」【①直説法能動相現在1人称単数、②同・完了1人称単数、③完了（受動）分詞男性単数主格】のうち、第3形の変化語尾 (-us) を除いた部分、すなわち（多くは）-t に終わる部分が、様々な抽象概念語の語幹部を形成し、西洋近代諸国語の派生語へと継承されてゆくことになります。

こうして「基本第3形」の多くは「完了（受動）分詞」の -t までの部分を幹としますが、これは「目的分詞幹」と呼ばれるものに該当します。「目的分詞」とは一種の動名詞で、-um に終わる第1形（「～するために」）と、-iō に終わる第2形（「～する上で」）とを持ちますが、第1形は「完了（受動）分詞中性単数主格」の形と同一です。

なぜ「目的分詞」(a) と「完了（受動）分詞」(b) の幹部分が一致するのでしょうか。印欧祖語に近いサンスクリットでは、-ta (女性形は -tā) で終わる「過去分詞」(b') と、-tum で終わる「不定詞」(a') は、ともに t の音を含んでいますが、t の前に現れる語根部にに関して、両者は「母音の階次」の上で異なり、一致しないことがよくあります（過去分詞の母音は弱階、不定詞の母音は中階）。ラテン語では、語根部における母音の階次が不明瞭となり、かつ完了（受動）分詞の中性形では両者が同じ語尾を持つため、このような現象が起きたものとわたくしは考えています。

(あきやま・まなぶ)